

キリストの使徒たちが伝えたこと(2)

—使徒信条とは—

「イントロダクション(2)」

使徒信条

我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。

我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。

主は聖霊によりてやどり、処女マリヤより生れ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父(ちち)なる神の右に座したまえり。かしこより来たりて生ける者と死にたる者とを審きたまわん。

我は聖霊を信ず。

聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪の赦し、身体によみがえり、永遠の生命を信ず。
アーメン。

1. はじめに

(1) 使徒信条の内容

- ①三位一体論を土台とした信仰告白である。
- ②キリスト論が一番強調されている。

(2) 使徒信条の歴史

- ①短い形のは、古ローマ信条と呼ばれる(紀元140年頃まで遡る)。
- ②現在の形のは、紀元8世紀まで遡ることができる。
- ③使徒信条は、使徒たちの作品ではないが、使徒たちの教えが要約されているので、使徒信条と呼んでもよい。

(3) 使徒信条が必要とされた理由

- ①洗礼式のために
- ②異端との戦いのために
 - *2世紀に入ると、グノーシス主義との戦いが激しくなった。
 - *グノーシスとの論争は、救済論に関係したものである。

(4) 「信ず」という言葉について

- ①信仰とは、単なる知的承認ではない。
- ②信仰とは、個人的な信頼のことである。
- ③信仰とは、信じる対象としての神が存在することである。
- ④信仰とは、神が与えてくださった良き約束に信頼することである。
- ⑤信仰の有効性は、その人の熱心さによってではなく、信じる対象によって決まる。

(5) 信じることに関する疑問

(例話) 「神なんかいるはずがない」と飛行機の中で叫んだ男性の話

(例話) 「神がいるなら、なぜ〇〇があるのか」という疑問

- ①悪や苦難の存在と、天地を創造した愛なる神の存在とは、調和するのか。

2. アウトライン

- (1) 人間の自由意志
- (2) 人間の成長の可能性
- (3) 人間とともに苦しまれる神

3. 結論

- (1) 信仰者の応答(詩131)

このメッセージは、苦難の意味について考えようとするものである。

I. 人間の自由意志

1. 創世記1~3章の学びで出て来る質問

- ①神はなぜ人間を、罪を犯さないように造らなかったのか。
- ②もしそうしていたなら、人間はロボットのようになっていたであろう。
- ③罪を犯す可能性のないロボット型人間と、罪を犯す可能性のある自由意志を持った人間と、どちらが優れているか。

2. 人間が人間であるために必要な条件

- ①自由に自らの選択ができる能力を持っていること。
- ②自由意志を否定したなら、人間が人間ではなくなる。
- ③人間性を否定した制度や組織が存在する。

* 奴隷制

* 全体主義国家

* カルト集団 (宗教団体だけでなく、政治カルト、経済カルトなどもある)

④ 英語で「責任」「責務」を、「responsibility」という。

* これは、「応答できる能力」という意味である。

* 人間には、神の命令に応答する能力が与えられた。

3. 自由意志の危険性

① 人間は自由意志のゆえに、神に従うことも、神に反抗することもできた。

② 神への反抗は、悲惨な結果をもたらす。

③ それでも、自由意志を持った人間の方がロボット型人間よりもすぐれている。

4. 最初の人アダム の失敗

(1) アダムは、自由意志を用いて、神の命令に反抗することを選んだ。

「そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がったのと同様に、——それというのも全人類が罪を犯したからです」(ロマ5:12)

(2) アダムは人類の代表として行動している。

① アダムの失敗によって、罪が世界に入った。

② 罪によって死が入った。

③ 罪が全人類に広がった。

④ 全人類は、アダムにあって罪を犯した。

(例話) 外務大臣がサインした条約は、全国民に影響を及ぼす。

5. 結論

① 悪の存在は、自由意志の誤用から来るものである。

* 死の問題

* 天変地異の問題 (地は呪われている)

② それでも、自由意志を持った人間の方が、ロボット型人間よりもすぐれている。

II. 人間の成長の可能性

1. 人間は、成長の可能性のあるものとして造られた。

(1) アダムに対する神の意図

「主なる神は人に命じて言われた。『園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう』」(創2:16~17)

- ①悪を避け、善を選ぶことを通して、アダムを成長させようとした。
- ②善と悪がともに存在する世界での生活を通して、成長が可能となる。

(2) アダムの行為

- ①彼は、悪を体験することによって、善悪の知識を得てしまった。
- ②彼自身が、悪の一部になったのである。

2. 神は、人間を成長させるために、苦難をお用いになる。

(1) 東日本大震災以降、日本は変わった。「震災前」と「震災後」。

- ①第2の敗戦とも言える(物質主義、成功哲学、エネルギー政策)。
- ②多くの人たちが、神がいるならなぜ、という疑問を抱くようになった。
- ③クリスチャンも例外ではない。信仰が揺さぶられている。

(2) 西洋のキリスト教(物質主義的、成功志向のキリスト教)の盲点

- ①「苦難」の意味の喪失
- ②「苦難」は神の計画の一部である。
- ③私たちの品性を練り、完成へと導く。
- ④試練の中での霊的覚醒(目覚め)
 - *使徒行伝の伝道の拡大
 - *共産圏での霊的覚醒(目覚め)

(3) 苦しみの意味

「苦しみに会う前には、私はあやまちを犯しました。しかし今は、あなたのことばを守ります」(詩119:67)

- ①苦しみの体験は、作者の信仰を成長させた。

「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました」(詩119:71)

- ①イスラエルは、バビロン捕囚によって偶像礼拝から解放された。
- ②各人が、苦難を通して、より深く神の教えの意味を理解するようになる。

3. クリスチャンは、苦難を通して成長していく。

(1) 高齢化と死は、クリスチャンにとっても現実的な課題である。

(例話) 飛行機の中で、ラスベガスに行く人に出会った。

①年老いたクリスチャンの姿は、完成形を予想されるものである。

「ですから、私たちは勇気を失いません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです」(2コリ4:16~18)

①今の患難は、軽いものである。

②将来与えられる栄光は、計り知れないほど重く、永遠のものである。

Ⅲ. 人間とともに苦しまれる神

1. 2つの誤解

①苦難のない人生が一番いい人生である。

②人間が苦しむ時、神は遠く離れて立っておられる。

2. アブラハムがイサクを捧げた出来事

「これらの出来事後、神はアブラハムを試練に合わせられた。神は彼に、『アブラハムよ』と呼びかけられると、彼は、『はい。ここにおります』と答えた。神は仰せられた。『あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい』(創22:1~2)

(1) いくら神とは言え、このような命令をする権利があるのか。

①神は愛のお方なのか。

②神は、専制君主のようなお方なのか。

(2) 父なる神が子なる神を犠牲にするという前提で読まなければ、意味は分からない。

①神は、私たち人間の罪、苦しみ、不安を背負われるお方である。

②私たち人間が通過するすべての苦難を知っておられる。

3. 子なる神が苦しむ時、父なる神も苦しまれる。

(1) ゲツセマネの祈り

『父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わた

しの願いではなく、みこころのとおりにしてください。』すると、御使いが天からイエスに現れて、イエスを力づけた。イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた」(ルカ 22:42~44)

- ①「この杯」とは、罪に対する神の怒り、裁きのことである。
- ②イエスは今、「罪とされ」、父なる神から切り離されようとしている。
- ③その苦しみは、汗が血のしずくのように地に落ちるほどのものであった。
- ④この時、父なる神もまた苦しみを通しておられた。

(2) 人生観を革命的に変える認識

- ①私たちが苦しむ時、キリストはともに苦しんでくださる。
- ②キリストが苦しまれる時、父なる神もともに苦しんでおられる。
- ③この認識は、苦難に立ち向かう私たちの姿勢を変える。

結論：信仰者の応答(詩 131)

(都上りの歌。ダビデによる)

「【主】よ。私の心は誇らず、私の目は高ぶりません。及びもつかない大きなことや、奇しいことに、私は深入りしません。まことに私は、自分のたましいを和らげ、静めました。乳離れした子が母親の前にいるように、私のたましいは乳離れした子のように私の前におります。イスラエルよ。今よりとこしえまで【主】を待て」

1 節

「【主】よ。私の心は誇らず、私の目は高ぶりません。及びもつかない大きなことや、奇しいことに、私は深入りしません」

- (1) 人生は謎に満ちている。
- (2) この世界には、人間に理解できることと、できないことが同居している。
- (3) 自分はあらゆる問題に対する答えを持っていると考える人は、愚かで傲慢。
 - ①なぜ、この世には悪が存在するのか。
 - ②なぜ、ある人たちに悲劇が起こるのか。
 - ③神の主権と人間の自由意志の関係はどうなっているのか。
 - ④なぜ、ある祈りは聞かれ、ある祈りは聞かれないのか。
- (4) 難問に直面したときのダビデの視線は、低いところにある。
 - ①彼は、自らの無知を告白している。
 - ②「私は知りません」と言える人は、謙遜な人である。

2 節

「まことに私は、自分のたましいを和らげ、静めました。乳離れした子が母親の前にいるように、私のたましいは乳離れした子のように私の前におります」(2 節)

- (1) 乳離れした子(離乳期の子)を例に上げ、自分の心の状態を解説している。
- (2) 最初はむずかっていた子も、母親の胸に抱かれると、安心しておとなしくなる。
- (3) ダビデもまた、神の御前でそのような平安の体験をしている。
- (4) 心が揺れ動く時、彼は自らの無知を告白し、神がすべてをご存じであることを信じて魂の平安を得ている。

3 節

「イスラエルよ。今よりとこしえまで【主】を待て」(3 節)

- (1) 全知全能の神に信頼することこそ、平安の秘訣である。
- (2) そのことをイスラエルの民に語りかけている。
- (3) 「【主】を待て」とは、「主に希望を置け」という意味である。